

加藤園長と宮下友美恵先生の特別寄稿！（2017年8月7日）

子どもたちの未来のために

幼稚園教育要領改訂に際して



65%の子もが将来、存在していない職業に

この書に告示された幼稚園教育要領改訂は、その審議の場である中央教育審議会（幼児部会）で、委員の先生方に様々な資料が提供されます。そのひとつに「今、幼稚園に通っている園児達び、大学を卒業する頃には、65%の子もたちが今は存在していない職業に就く」(キャッシュ・ナビゲーション、ニューヨーク市立大学大学院センター教授)今後10～20年程度で、約47%の仕事が自動化される可能性が高い(マイケル・A・オスボーン氏・オックスフォード大学准教授)という情報がありました。メディアでも度々取り上げられましたので、みなさんもお耳にされて

いることでしょう。既に私たちは「高度技術革新社会」に生きています。絶えず技術は革新され生活は、より便利になり続けています。そのため会社に勤めた後も、向上を目指して創造的な営みを続けることになり、自分自身もまた技術革新に呼応して高めていくこととなります。まさに生涯学習圏です。

幼児期にこそ「学ぶことが楽しい」という原体験が必要

実はこの時代の到来を見通して平成元年での教育要領改訂では、学び手である子ども自身の視点にたつた転換がはかられました。「教師が何を教えたかではなく、子どもは何を学んだか」で考えるということなのです。それから30年近くが過ぎましたが、未だ社会は、教育とは先生の言うことをよく聞いて、先生の言うとおり行動する子が良いだけの価値観から脱却できずにいるように思われます。もちろん、「先生の話をしっかりと聞いて行動すること」は大切

園で繰り広げられる解決までの過程の中に「学び」の原体験が

教育要領の改訂においても「環境を通して行う教育」は基本です。「遊びと生活を通して総合的な指導」という考え方も変わりません。「遊びは幼児期の発達特性にあった「学び」の手段」であるからです。「どうすれば面白い泥団子ができるのか」「どうすればびびりが光るのか」「意見対立や葛藤を乗り越えて、友達と仲良く遊ぶためにどうすればよいのか」と園内で日常的に繰り広げられる解決までの過程の中に「学び」の原体験があります。「遊び」「生活」には教科書がないため答えは自分で見つけなければなりません。それ故、繰り返し

なのです。さらに加えて幼児自身が未来に向かって生涯学習し続ける存在として、幼児期にこそ「学ぶ」とが楽しい「自分が向上することがうれしい」という原体験を大切にすることが求められているのです。

て取り組んで達成した時の喜びは大きい。確かに自分で獲得したという格別な気持ちです。その喜びを大好きな先生や友達と共有できればより強い力になるでしょう。このような大切な役割を担っている幼児教育は、OECD諸国においても研究が進み、各国家レベルで蓄積されていくデータを元にEDEC（乳幼児教育とケアのインターナショナル科学的な根拠）が構築されています。幼児教育の重要性は世界的な視野のもとで共通に認識されるようになってきました。とはいえ、大切なのは私たちが目の前にいる幼児の幸せな成長です。幼児がそれぞれの園で大切にされ、一人ひとりの思いを受け止められ、子どもたちが自分の安心の居場所が見つかり、自分の学びの世界を広げていく。この営みは地道であるけれど、私たちが子どもとのやりとりを楽しみながら子どもたちが未来を楽しく、そしてたくましく生き抜くように願って幼児教育に取り組んでいきたいと思うのです。

言葉、表情、行動等を通して思いで子どもの心は育ちます

私たちは日々の生活のなかで、まわりの人とかかわりながら、思いをもちたり、思いをあげたりして生きています。思いというのは、それ自体目には見えませんが、何かを通して表れてくるものです。風は目には見えなくても木の葉が揺れたり、旗がなびたり、風鈴の音が聞こえたりすること、その存在に気付くのと似ています。

どもは家族や身近な人の笑顔から「あなたが大好き」「あなたといくと、とてもうれしい」という温かな思いを感じ取り、安心感や喜びを味わいます。このように相手の言葉、表情、行動等を通して表された思いをもち、子どもたちの心は豊かに育っていきます。

絵本の読み聞かせは乳幼児期にとっても大切

そのような経験の「一つとして」、乳幼児期に絵本の読み聞かせをするのは、とても大切なことです。忙しい日々の中でも、子どもを膝のせて絵本を一冊に読む時間は、かけがえのない時間です。子どもは絵本を読んでもらうことが大好きです。絵本の世界に浸って様々な感情体験をする楽しさはもちろんありますが、それと同時に、子どもは傍らで本を読んでもくれる人の温もりや声、息づかいを感じ、幸せな気持ちになるのです。

思いはあげればあげるほど湧き出てくるもの

思いをもち喜びを知って育った子どもは、自分の思いを大事な人へあげたいと思うようになり、朝、先生や友達に会えたことがうれしくて「おはよう」に元気においさつをする子、転んで泣いている友達に駆け寄り「大丈夫～」と心配そらにのぞきこむ子。園庭に咲いたシロツメクサを摘み、「これ、おかあさんにあげる」と花束をギョッと握りしめている子。「いっぱい飲んでね」と声をかけながら、花壇の花に水をあげている子。その一つひとつの言葉や表情、手の動きのなかに、子どもたちの素直な思いが表れています。

を丁寧に返していくことが大切であると思います。思いは「物と違っていて、誰かにあげると無くなってしまふもの」ではありません。あげればあげるほど、自分の中から湧き出てくるものです。思いをあげることによって自分が豊かになっていく。本当に不思議なことですが、この不思議な事実を、子どもたちに知らせることができるとしたら、私たちは決して無くなることのない宝物を、子どもたちにプレゼントしたことになるのかも知れません。

目には見えない贈りもの

人が人として生きていくうえで大切な「思い」について全日本私立幼稚園連合会の園下教育研究委員会委員長の加藤園長が語りました。



- ・学校法人 静岡豊田学園 静岡豊田幼稚園 園長
 - ・全日本私立幼稚園連合会 教育研究委員会 委員長
 - ・公益財団法人 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 研究研修委員会 委員長
 - ・一般社団法人 静岡県私立幼稚園振興協会 副理事長
- 宮下友美恵 先生



- 加藤 園長
- ・内閣府 子ども・子育て会議委員
- ・公益財団法人 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 理事
- ・公益社団法人 東京都私立幼稚園教育研修会 理事長



特別寄稿